優秀

妹の思いは妹が決めるもの

旭中学校　3年　橘（たちばな）　環子（わこ）

みんさんは障がいと聞いてどういうことを思い浮かべますか。たぶん、多数の人が「不幸」「かわいそう」などの言葉を浮かべたのではないでしょうか。私は全くそのような思いを浮かべません。なぜ根拠もなくそんなことが言えるのか、それは身近な人物の影響なのかもしれません。

私には十歳下の妹がいます。五年前の四月。千グラムで生まれてきた妹は、脳室周囲白質軟化症（ＰＶＬ）だと診断されました。ＰＶＬの影響で妹は足が不自由なうえ、知的障がいと重度の自閉症をもってしまいました。歩いているとすぐに転んでしまうし、思考の違う他の子との対立がよくみられてしまったため遊びに行くこともあまりできません。そんな妹を見て一瞬だけ「不幸だな」と思ってしまうことがありました。そんな時に、妹の行っている療育センターに同行することとなりました。療育には、色々な障がいをもっている方がたくさんいて、私はその人たち全員を「かわいそう」という目で見てしまっていました。けれど、妹のリハビリを手伝っている時に妹の担当をしてくれていた先生の一言で周りを見る目が変わりました。「自由なようにやらせてあげて良いんだよ。静かに見守ってあげるだけで幸せなんだから。」その言葉を聞いた途端、「不幸だ。」「かわいそうだ。」という思いがどこかへ飛んでいき障がいをもっている人に対する偏見がなくなりました。それを機に、障がいをもっている人に実際にお話を聞いてみたくなり、塾の国語の先生に色々と質問をしてみました。先生も障がいをもっていて足が不自由なため、つえをつきながら生活をしています。けれど、先生はそんな生活に対し「楽しい」と話していました。それに、自分はかわいそうでも不幸でもないと言っていました。「僕自身、自分のことをかわいそうと思ったことはない。けど周りの人に偏見をもたれることが一番悲しいかな。」この話を聞いて改めて偏見というものがどれだけよくないものかわかりました。

このように色々なことを踏まえて私はその思考にたどり着きました。今まで暗い表情に見えた妹の顔が、明るくにこやかな笑顔に変わっている気がしました。みなさんもすぐにとは言いませんが、少しずつ障がいへの思いを偏見ではなく、人の気もちになって考えてみると良いかもしれません。他人の幸せは他人が決めるもの。妹の幸せも妹が決めるもの。その思いを大切にしながらこれからも妹が大好きと言える姉でいることが私の一番の願いです。